Women Artists Association

NEWS

女流画家協会 会報

2020. 5 Vol. 8

第73回女流画家協会展（2019年）受賞作品より

東京都美術館に於いて、開催予定の「第74回女流画家協会展」（2020年5月29日～6月4日迄）は、新型コロナウイルス感染拡大による政府の緊急事態宣言を受け、中止致しました。第74回女流画家協会展に向け準備しておりました会報を出品予定者の皆様に配布致します。

新事務所スタート

節目となる75回展を前に、様々な活動がスタートしています。

ごあいさつ

第74回、75回展　事務所代表　中村 智恵美

2019年11月に2年ぶりに新役員6名と事務所代表に再就任致しました。「報告」、「周知」、「遺す」を主なテーマとしてお話しします。

「報告」、第60回展より御後援頂いている文化庁と東京新聞に加え、第74回展より東京都からも後援を頂ける事となりました。東京都美術館を主会場と考えている当会としては、大変光栄と感じております。三団体のご厚意に甘んじることなく、当会の趣旨にもあります、優れた女流画家の登竜門となる、を強く再宣言し委員一同襟を正したいと感じております。

「周知」、絵を描かれない一般の皆様には公募団体と言っても具体的な活動を知らない方が殆どです。自分達で募集し審査。その後、芸術作品を美術館で展覧する。海外には無い日本独自の組織であり、もはや日本文化です。当会は既に戦後昭和21年より74回展目。どの団体もこれからを考える時期に来ていると感じます。女流画家協会は、女性のみ、他団体所属可という独自路線で歴史を積み上げて来ました。因みに当会の委員会員年会費は多分どの会よりも少額です。初めは女性なので家の負担にならない様にが、主であったと思われます。しかし工夫が実り会の大きなエネルギーとなっている事を申し添えます。充実した過去の歴史を基盤とし、しかし型に拘らず事務所から旗を振りホームページやブログ等、勿論個々の活動等はこれまで以上に、どう行動する事務所にするかと、常に議論と勉強の日々です。可能な限りの機会を利用し、周知に努力しなければならないと考えております。

「遺す」、また会の宝である人材や作品を労い如何に独自に遺すかも考えざるを得ない時代となりました。ご高齢の先生方の作品を当会が所蔵する様に努力したいと考えております。委員の諸先生方と協力し、組織をもっと柔軟且頑強にして参りたいと考えております。女性のみが弱みにならない様に、絵を描いている事が幸せと感じて頂ける会にと希望しております。

人生100年時代となりました。女性のARTISTの皆様、私達と一緒に年に一回展覧会を楽しみましょう！新鮮で優秀と判断されれば必ず貴女の作品に賞を贈り応援する事をお約束します。

新事務所スタッフ紹介

皆様と共に頑張ります。ご協力宜しくお願いいたします。

会計（支出）
平川きみ子

会計（収入）
中嶋しい

広告・印刷
杉本弘子

支出補佐
大前美登利

印刷・収入補佐
徳中壽子

第72,73回展報告

若い人が出品しやすい体制ができ、出品者が増えました。前事務所の皆様ご苦労様でした。

事務所代表を終えまして

前事務所代表　佐々木 里加

本年も女流画家協会展にご来場賜りまして誠にありがとうございます。第72、73回展におきましては、皆様のお力添えのお蔭様をもちまして、盛況のうちに終了することができました。この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。

昨年の第73回展では、女流画家協会73年の歴史上初めて、当会委員から日本芸術院会員が誕生いたしました。2018年12月15日付で、文部科学大臣より発令されたものです。日本芸術院とは、後援を頂いております文化庁所管の栄誉機関で、会員となりました馬越陽子委員は、2014年に日本芸術院賞を天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、御臨席のもと受賞されたのち、一昨年日本芸術院会員となりました。これは女流画家協会として非常に名誉な事でございました。昨年は貴重なお時間を割いて、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞された、当会ご提賞者であります、大村智先生に授賞式にご出席頂き、そしてサプライズでご来場いただきました宮田亮平先生からも、非常にありがたいお言葉を頂戴することが出来、会を盛り上げていただきました。

第73回女流画家協会展は、文化庁、東京新聞の後援を変わらず頂きまして、総搬入点数1004点、会期中の入場者数は、1万757名でございました。より出品されやすいよう対策を練り実行させて頂いた結果、第72回展の総搬入点数900点から出品点数を104点伸ばしまして、1004点の搬入を頂きました。また、初出品点数132点、初出品者数79名と、美術団体展も景気が思わしくないこの時期に、喜ばしい結果を出すことが出来ました。出品作品規定を変え、第73回展よりサイズの下限を完全に取り払うことを決定、また第72回展より出品規定の年齢制限を外すことを決定し、実行致しました。第71回展から25歳以下の方の出品料を5千円とすることも続けており、昨年は10代、20代の出品合計人数27名となり、若い方々の出品人数も増えてきております。

今後も皆様の女流画家協会として、皆様で楽しんで盛り上げて頂き、益々発展いたしますことを心より願っております。

大村智先生ご来場

左より会計黒沢、馬越委員、会計伊藤、大村氏、佐々木代表

前会計（支出）　伊藤 育子

2年間ご協力、ご指導ご鞭撻をいただきました女流画家協会の委員の皆様をはじめ、すべての関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

今まで会計はやってもらって当たり前という仕事をしてきた私にとって、気遣う視点が全く違う経験でしたが、おかげさまで組織への思いが強くなりました。協会の運営内容を知ることができたし、何よりも先人たちが大変なエネルギーと時間を、 73年の協会の継続に注ぎ込んできたことを目の当たりにし、また感じ取ったからです。

集団への貢献といえば、「まず知恵を出せ、知恵が出なければ汗を出せ、汗も出せないなら金を出せ」と言われます。私は結局何一つ出すことができず、あたふたするばかりの2年でした。次の方々に手渡すものが何もないままに任期を終了したことを心から恥じつつ、「ありがとうございました」の気持ちだけは、私の相方の黒沢さんをはじめ皆様方に、ただただお伝えしたいばかりです。

前会計（収入）　黒沢 裕子

2017年6月のある日、女流画家協会会計を引き受けて欲しいとのお電話がありました。母が他界した翌日の事でした。母は、私が初出品の時から女流画家の方々の活躍を楽しみに毎年会場を訪ねてくれていました。突然のお話に戸惑いながらも、女流展のお手伝いをするのは母への供養になるかも知れないと思い、会計を引き受けました。でも、果たして女流展会計の仕事が私に務まるだろうかと不安で一杯にもなりました。

それから2年間は毎日が無我夢中。会費を集めたり、女流展運営に関わる数多くの資料作成の為、過去のデータを何度も見直したり、会計の仕事は山のようにあり、何か忘れている事はないかと心配の連続でした。

固定した事務所を持たない女流展は、委員や会員の方々の多くの協力が無ければ運営が難しく、毎年の本展を開催するには大変なエネルギーが必要と痛感しました。

振り返りますと、改めて、女流画家協会展の崇高な歴史の重みを感じた2年間でした。大変貴重な経験をさせて頂きまして有難うございました。

73回展イベント報告

毎回、いろいろな催しが行われています。ぜひご参加ください。

授賞式・懇親会（出品者のみ）

「授賞式・懇親会」は初日の17:30～東京都美術館のレストランミューズで行われました。ご来賓には提賞者の方々・評論家の方々・美術雑誌関係・画材店の方などにご列席を頂きました。出品者・来場者の皆さんは、あまり話す機会の無いご来賓の方々とも、和やかに会食をしながら、画材の話から現代の多様な芸術活動に至るまで、熱心に語り合っていました。勿論、絵を描く女性同士のパワーがみなぎる楽しい交流の会になりました。（黒沢）

授賞式

懇親会

出品者作品講評会

「出品者作品講評会」は女流展の後半に行われました。会期中に出品者の方々に講評会の申し込みをして頂きます。当日は出品者の展示室で2～3名の担当委員が申し込み者の作品を前にして丁寧に講評致しました。毎回多数の方に申し込みを頂きましてとても好評でした。講評会では、出品者の方々が熱心に自分の作品について語られ、委員との間では作品に対する強い思いの溢れる質疑応答がされました。絵を描く悩みや喜びを分かち合える実りの多い場になりました。是非次回もこの貴重な講評会にご参加ください。（黒沢）

委員ギャラリートーク

「委員作品解説」は女流展の中日に2日間行われました。1日目は1室～3室、2日目は4室～6室に分けて、各部屋の委員の作品を作家自身が作品解説を致しました。各日とも、多数の来場者・出品者の方々が熱心に解説を聞かれていました。また作家への質問では、日々の作品制作の態度や、芸術論に至るまで活発な意見交換がありました。実際に作家との交流は学ぶところが多く刺激的です。とても有意義な時間になりました。（黒沢）

ワークショップ

会期中の6月1日、13時30分より都美術館2Fスタジオで行われました。

担　　当：吉江麗子、松本恵美、補佐(徳中壽子、照山ひさ子、山本優里)
受付事務：松田雅子
参 加 者：32名(うち男性1名)

テーマ　　身近な野菜を自分らしく表現する

・《準備したもの》
各用紙、針金、
麻紐、絵具、鉛筆、
その他

・《各自用意してきたもの》
手に乗る程度の野菜、
自分のイメージした使いたい画材

制作時間は約2時間。今年も吉江委員がマイクを手に持論である「アートは明日の自分を探す旅」の話から始まり、テーブル間を回って声をかけると、参加者も固定概念にとらわれず自由な発想で、長方形が変形した形や、立体的にするなど楽しんで制作していただきました。次への制作のヒントになればと思います。制作終了後、各テーブルの上に作品だけを置き、テーブルも白のキャンバスに例えて、前回同様参加者にそれぞれの、制作意図等を語っていただき意見交換をしました。
アンケートには32名中27名の方が回答。“制作のヒントになった・固定観念を捨てることが難しかった・やめ時も大切と思った・楽しくできた・いつもしない事ができるので楽しい・野菜を中心に、いろいろな発想がうまれた・紙の四角さにこだわらず、バクハツさせてもよいということを理解できた” 等々のご意見をいただきました。

〔ワークショップを3年担当して〕
まず心がけたのは、楽しく制作できること、固定観念にとらわれないように、自由に自分の感性を表現できるように持っていく事でした。自分の身の回りに表現する素材がたくさんあることに気づいてほしいと思います。ちょっとしたアドバイスで、制作途中の作品が変わっていきます。今まで女流に出品していなかった方が、ワークショップをきっかけに出品してきたことは女流にとって大きな意義があると思います。（松本）